

2021年度 第32回 中唐文学会大会のお知らせ（第2号）

残暑厳しき折、会員の皆様にはお元気でお過ごしでしょうか。

第32回中唐文学会大会は、10月8日（金）の13時より、以下の要領で開催いたします。ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。なお、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染拡大の現状に鑑み、当初の予定（愛知県立大学で開催）を変更して、すべてのプログラム（※懇親会を含む）をオンラインで開催することにいたしました。大会・懇親会の参加のお申込みは、この「お知らせ第2号」の2頁「お願いとお知らせ」にご案内がございます「お申込みフォーム」より行ってください（お申込みの方法は昨年度と同じです）。

会 場：Web会議サービス「Zoom」を用いてオンラインで開催いたします（参加無料）

日 程：10月8日（金） 13時開始

~~~~~  
12時40分～ 「Zoom」ミーティング・ルームへの入室開始（受付不用）

12時50分～ 開会の挨拶

### ・シンポジウムⅠ【唐代文学と祭祀】（13時00分～15時00分）

趣旨説明（13時00分～13時15分）

**発表①**（13時15分～13時55分）

題 目：韓愈「鱷魚文」とその周辺——唐代の祝文系作品における地方官と神霊

発表者：谷口高志（佐賀大学）

**発表②**（13時55分～14時35分）

題 目：唐代文人と華山廟——祀典と淫祀のあいだ

発表者：加藤聰（京都女子大学）

**総合討論**（14時35分～15時00分）

司会（兼コメンテーター）：好川聡（岐阜大学）

コメンテーター：鈴木達明（愛知教育大学）

### ・シンポジウムⅡ【唐代仏教靈驗譚の研究】（15時10分～17時30分）

趣旨説明（15時10分～15時15分）

**発表①**（15時15分～15時35分）

題 目：孟献忠『金剛般若経集験記』にみる経典靈驗の多様化

発表者：佐野誠子（名古屋大学大学院人文学研究科准教授）

**発表②**（15時35分～15時55分）

題 目：『仏頂心陀羅尼経』漢語諸本の校勘から見えてきたこと

発表者：福田素子（聖学院大学非常勤講師）

**発表③**（15時55分～16時15分）

題 目：道宣の感通と「東夏」意識の変遷

発表者：齋藤智寛（東北大学大学院文学研究科教授）

**休憩** (16時15分～16時20分)

**講演** (16時20分～17時10分)

題 目：機と時：道宣『集神州三宝感通録』およびその感通論について（使用言語：中国語。通訳無し）  
講演者：劉苑如先生（台湾中央研究院中国文哲研究所研究員）

**総合討論** (17時10分～17時30分)

司会：佐野誠子  
通訳補助：張禧睿（名古屋大学大学院生）

・ **総会 (17時40分～18時00分)**

・ **懇親会 (18時00分～19時30分)**

※大会と同じく「Zoom」上で行います。途中参加・途中退室可。

※お食事・お飲み物は各自でご用意ください。

~~~~~  
お願いとお知らせ

▼本年度の大会および懇親会の参加のお申込みは、下記の「お申込みフォーム」より行ってください。

※「お申込みフォーム」は中唐文学会のブログにも掲載予定です。なお、ブログのフォームはURLが異なりますが、どなたさまもいずれからもお申し込み頂けます。

※「お申込みフォーム」にお申込み頂いたメールアドレス宛に、10月1日（金）以降、順次ZoomのURLをお送りいたします。

※Zoomミーティングに参加するには、パソコンにカメラやマイクが内蔵されているか、外付けのWebカメラを用意する必要があります。各自でご確認のほど、宜しく願い申し上げます。なお、Zoomの技術的なサポートにつきましては対応いたしかねます。あしからずご諒解ください。

※ご不明の点は幹事までお問い合わせください。

【2021年度 中唐文学会 大会・懇親会 お申込みフォーム】

<https://forms.gle/kzaediobpf7dp32PA>

▼本会は、会費の納付で会員資格継続の作業を進めます。

同封した振込用紙に金額をご記入の上、お振り込み下さいますようお願いいたします。

【振込先】 口座番号 00100-8-631654 口座名称 中唐文学会

正会員3,000 円、準会員（会報不要の方）1,000 円

準備の都合上、会費振込および大会・懇親会の参加のお申込みは

9月30日（木）までにお願い致します。

各問い合わせ先

大会関連： 洲脇武志 (t-suwaki@jps.aichi-pu.ac.jp)
幹事(会報)： 栗山雅央
幹事(会計)： 鈴木達明
幹事(広報・名簿管理)： 長谷川真史

シンポジウム I 【唐代文学と祭祀】

【趣旨説明】

本シンポジウムは、祭祀を題材とした唐代の文学作品を取りあげ、神霊や祠廟をめぐるどのような議論が展開されてきたか、また社会や風俗、ひいては国家のあり方に関して、いかなる価値観や問題意識が表出されることになったのか、について検討することを企図したものです。唐から宋にかけて起こった、皇帝祭祀に関する諸制度の変遷、それに伴う国家観の変質、また地方共同体における祭神や祠廟の組織化、体系化などといった問題については、近年、歴史学の分野において盛んに研究がなされ、優れた成果が蓄積されつつあります。

その一方、文学研究の立場から、直接、祭祀の問題を扱おうという試みは、唐代に限っていえば、いまだ十分になされていないように思われます。唐代の文人たちは、実は祭祀の営み、およびその舞台たる祠廟に多大な関心を寄せ、様々なかたちでそれを詩文に詠っており、個々の祭祀の実情を最も生き活きと後世に伝えるのも、それら文学作品に他なりません。また祭祀に対する意識や観念、神に寄託された感情の諸相を最も雄弁に語るのも、やはり文学作品であるといえるでしょう。特にわれわれが問題とする中唐期は、初・盛唐期までに整備されてきた皇帝祭祀が次第に機能しなくなり、それに代わって民間で行なわれる地方祠祀が注目を集めるようになる一大転換期であったと目されます。中唐期におけるそうした変化は文人たちの価値観にも大きな影響を及ぼし、それは彼らの文学において〈正統と異端〉（祀典と淫祀）、〈王権と蛮神〉（官僚と怪異）、〈中央と周縁〉（朝廷と辺境）、〈雅と俗〉（神聖性と大衆性）、などの対立となって表面化してくるよう思われます。本シンポジウムでは、以上の観点から、唐代文学と祭祀をめぐる問題の一端について、二名の報告者が発表を行い、会員諸氏のご意見・ご批判をいただきたく存じます。

①「韓愈「鱷魚文」とその周辺——唐代の祝文系作品における地方官と神霊」 谷口高志（佐賀大学）

唐代の文学においては、中唐期前後を境に民間祭祀に関する言及が目立つようになる（〈淫祀〉と呼ばれる朝廷非公認の祭祀を含む）。中唐期の文人たちは、なぜ民間祭祀を問題とするのか、その営みにいかなる眼差しを向け、どのような意識や観念を持つに至ったのか。発表者は、こうした問題についてこれまで研究を行ない、その成果として近年、「中唐期の詩歌における祭祀と龍——龍を斬る詩人たち」（『中唐文学会報』二六、二〇一九）、「唐代文人と辺地の神——白居易の祝文を中心に」（『佐賀大言語教育』五、二〇二一）などの論考を発表してきた。本発表では前稿に引き続き、中唐期の祝文系作品（祝文とそれに類する作品群）について考察を加えてみたい。

祝文とは、散文の文体の一種であり、祭祀の際に神に捧げる文をいう。唐代では、たとえば旱魃の際などに、州県の長官が当地で信仰されている民間の祠廟に赴き、そこで雨乞いの儀式などを主宰することが、礼典によって規定されていた。地方に赴任した官吏は、そうした祭祀活動のたびに自ら祝文を草する必要がある（代筆の場合もあり）、その結果、唐代には数多くの祝文が残されることとなる。それら祝文の作は、公的な要素の強い文であり、伝統的な型を踏襲するかたちで書かれることが多いのだが、中唐期のそれには、定型の枠を超えたものがしばしば見られ、ときには官と神の関係をめぐる興味深い認識が語られ、またときには祭神に対する屈折した

感情があらわに示される。

前稿では、そうした中唐期の祝文のうち、主に白居易の祝文を取りあげ、地方官と神霊の間における、ある種の緊張関係に着目し、当地の神霊を王権の代行者たる自らに従属させようとする意識について、また近世的な〈神の官僚化〉や〈官の神格化〉といった観念の萌芽について検討した。今回の発表ではその論を承けつつ、韓愈「鱷魚文」に焦点をあて、他の関連作品も挙げながら、地方官と当地の神霊および怪異との関係性について改めて考えてみたい（「鱷魚文」は、潮州の民に害を及ぼす水怪・ワニに対して退去を命じるという趣旨のもの）。併せて怪異を好んで詠う中唐文学の風潮についても、若干の考察を試みたい。

②「唐代文人と華山廟——祀典と淫祀のあいだ」 加藤聰（京都女子大学）

西岳華山は、五岳四瀆の一として王朝による祭祀の重要対象であったのみならず、玄宗朝には「金天王」に封じられてそこでの封禪が企図されるなど、五岳中でも特別な重視を受けた。

華山祭祀の実質的・象徴的な中心となるのは、華山（岳）廟である。長安から洛陽にいたる街道近くにあったこの廟では、祀典に則った公の祭祀として国家鎮護や豊穰・時雨などの祈願が行われたが、同時にそこは、道ゆく者に紙銭や供え物を売り、神託を媒介すると称する巫覡がさかんに活動する「淫祀」の場でもあった。

本報告では、華山廟をめぐる、李益・王建・張籍・元稹・白居易ら主に中晩唐の詩文を取りあげつつ、時に王朝による祭祀を代行する官僚の立場でもあった彼らの目を通した廟や淫祀のさま、祭祀に対する意識などを見てゆきたい。

シンポジウムⅡ【唐代仏教靈驗譚の研究】

【趣旨説明】

このたび、中唐文学学会大会を利用して、佐野が代表を務める科研費唐代仏教靈驗譚の研究（基盤研究(C)課題番号19K00368）に関わるミニシンポジウムを開催する機会をいただいた。代表者および分担研究者の成果発表および仏教志怪文学研究に造詣の深い台湾中央研究院中国文哲研究所の劉苑如先生にご講演をいただき、唐代仏教（文学）における靈驗や感通とは何かということへの考えを深められたら、と考えている。（佐野誠子）

①「孟献忠『金剛般若経集驗記』にみる經典靈驗の多様化」 佐野誠子（名古屋大学大学院人文学研究科准教授）

六朝においては、観世音信仰が盛んであり、その靈驗の記録については、陸杲ら『観世音応驗記』にまとめられている。唐代に入ると唐臨『冥報記』や郎余令『冥報拾遺』が編まれ、これら二書は、多様な仏教にまつわる超常的な事件をしるす中で、靈驗についての記録も含む。そして、孟献忠『金剛般若経集驗記』になると、仏教經典による靈驗の記録は、一定の達成を示し収束をみせる。収束というのは、その後も靈驗譚集は『法華経』『金剛経』などについて編まれるのだが、新規の内容が、段成式『西陽雜俎』金剛経鳩異を例外として、ほぼなくなり、既存のもの採録・再編集がほとんどになることを指す。この六朝から『集驗記』が編まれた八世紀はじめまでの間に、靈驗の依拠經典が『観世音経』から『金剛般若経』へと変わり、またその靈驗の種類も多様化した。

今回は『集驗記』における靈驗の多様化を指摘し、その背景について論じたい。

② 「『仏頂心陀羅尼經』漢語諸本の校勘から見えてきたこと」 福田素子（聖学院大学非常勤講師）

『仏頂心陀羅尼經』は大藏經に含まれない、所謂疑偽經の一つである。現存最古の写本は敦煌莫高窟から発見されたP三九一六であり、作成年代は八四二年より少し後と思われる。この經典は上中下の三巻に分かれているが、下巻にある四つの靈驗譚の一つが、発表者が研究している討債鬼故事の源流であると考えられる。

『仏頂心陀羅尼經』は中国本土以外に遼・金・西夏・朝鮮・越南・回鶻・日本で作られたテキストが伝わっており、漢文以外に西夏文と回鶻文のテキストが存する。西夏文テキストについては近年校勘が進んでいる。

発表者は現在敦煌写本P三九一六を底本にして、現在テキスト全体の影印が公表されている黒水城出土の漢語本、応県木塔本二種（遼本）、房山石刻本二種（金本）、敦煌出土の南宋本、そして台湾故宫博物院所蔵の明本、明本を元に覆刻された朝鮮王朝の刊本を校勘している。本発表ではこの校勘作業から明らかになったことを靈驗譚集である下巻を中心に報告し、並びに今後の展望を示したい。

③ 「道宣の感通と「東夏」意識の変遷」 齋藤智寛（東北大学大学院文学研究科教授）

初唐の僧・道宣（596-667）は、麟徳元年（664）から乾封二年（667）にかけて『集神州三宝感通録』『道宣律師感通録』を編み、また同時期の『中天竺舍衛国祇洹寺図経』もまた「天人」より感得されたものと自称しており、最晩年の遺著群が感通と深い関わりを持つことが知られている。こうした感通への著しい傾斜について先行研究においては、道宣が自説の正当性を強調するためとする理解と、天人の来告とはインド・西域の僧侶や居士との接見であったとする理解とが行われているが、いずれかに決着をつけるためには道宣における中華意識の変遷を検討する必要があると考える。本発表では、『道宣律師感通録』において天人が漢人風の名前を名乗り、漢語を話し、過去仏の時代に漢字がすでに存在したなどと語ることを意味を考察し、道宣にとって自説の根拠としてふさわしい人物が、壮年期における西域僧から晩年の漢語を話す天人へと変化したことを明らかにしたい。

【講演】機と時：道宣『集神州三宝感通録』およびその感通論について（使用言語：中国語。通訳無し）

劉苑如先生（台湾中央研究院中国文哲研究所研究員）

中唐以後に流行したある經典に限定した靈驗記や神僧の靈驗記と比べて、道宣（596-667）の『集神州三宝感通録』はそれまでの志怪や高僧伝、感應伝中の多くの靈異の故事を広範に引用し、舍利、靈像、聖寺、瑞経や神僧等の内容を含み、唐以前の靈驗を大成した総集だといえよう。

道宣は仏教の感通に対して、強烈な信仰心を抱いていた。彼の著作である『集神州三宝感通録』では、彼の仏教の歴史および人物に対しての独自の詳しい解釈を施しているのが見受けられる。同書序には次のようにある。

夫れ三宝の利見は、其の来たること久し。但だ信毀相競ふを以て、故に感応の縁有り。漢自り唐に泊^{およ}ぶまで、年餘六百。靈相の^{きつきょう}貯嚮、群録尋ぬべし。神化に方無く、機を待ちて^{たたく}扣く、光瑞出沒し、信を一時に開く。景

像 容を垂れ、迹を万代に陳ぶ。或いは**既往**^{あらか}に見れ、或いは**将来**に顕る。

一般の靈驗記の個人的な宗教体験から出発するのとは違い、道宣は仏教史家の一人として大局的な歴史の視点からの立論を試みている。「機」の語を用いて、三宝の靈瑞の発生を解釈し、また機と「時」とを密接に関連させている。いうなれば、道宣は信仰と排斥は前世の業に起因していると考えており、感応と靈跡は、前世の業に随い「機」によって現れるものであり、現れたり、現れなかったりするもので、衆生の心を激励するために、一時的に信心を起こすのではなく、過去においても、未来においても、心の思いに従い、業が流転する中、何度も現れるものなのだとしているのである。

そのため、『集神州三宝感通録』中の靈驗故事は独立した事件でありながら、往々にして過去、未来の事跡が交錯し、神秘的で多層的な叙事の網を構成している。その深層構造は、『易伝』の機を知り、機を研^{みが}く伝統にまで遡ることができ、また道において感応し交流するという禪学の理論からも恩恵を受けている。しかもさらに仏教の循環論的時間観念や業報観念とも密接に関連し、仏教の盛衰、歴史的な運命を解釈する基礎となっているのである。

以上